

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520360

研究課題名(和文) ポール・ヴァレリー芸術論テキストの生成論的研究

研究課題名(英文) Studies on the manuscripts concerning PIECES SUR L'ART of Paul VALERY

研究代表者

今井 勉 (IMAI, Tsutomu)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：40292180

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：フランス国立図書館西洋手稿部所蔵のポール・ヴァレリー『芸術論集』草稿資料全二巻(1923年から1935年までの芸術論草稿を収めた巻〔手稿分類番号NAF19068〕および1936年から1943年までの芸術論草稿を収めた巻〔同NAF19069〕)の全体に眼を通し、一部資料の完全筆写を行った。資料調査の成果に基づく学会発表(招待講演を含む)を複数回行い、『芸術論集』をはじめとするヴァレリーのテキストの翻訳・解説図書を二冊刊行した。また、著名な研究者による講演会を複数回開催し、有益な知見を得た。

研究成果の概要(英文)：We completed a total observation of all the manuscripts concerning the PIECES SUR L'ART of Paul VALERY, conserved in the Department of Occidental Manuscripts of National Library of France. On the basis of this preparation, we transcribed some important parts of the manuscripts. We participated in some international colloquiums and published the translations in Japanese of VALERY's texts on arts, and organized two conferences, one on the modernity of BAUDELAIRE by Professor A. Compagnon and the other on the modern poetic by Professor J-L. Steinmetz, which contributed to enrich our perspective on the cultural history of literary texts.

研究分野：仏文学・仏語圏文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：仏文学 ヴァレリー 生成研究 芸術論

### 1. 研究開始当初の背景

フランス第三共和制期の代表的詩人思想家ポール・ヴァレリー(1871-1945)は、はやくからレオナルド・ダ・ヴィンチをはじめとするイタリア・ルネサンス絵画に親しむ一方、師マラルメと親交の深かったドガ、マネ、ルノワール、ベルト・モリゾらの印象派絵画にも親しんだ。絵画から彫刻、舞台芸術、詩論に至るまで幅広いテーマをカバーした『芸術論集』のなかでも特に多くの頁を占めているのが、それら印象派画家たちをめぐるテキスト群である。とりわけ、ドガとの交流を綴った「ドガ ダンス デッサン」は『芸術論集』(1938年版以降)中、最大の部分を占め、それを取り巻くかたちで「ベルト・モリゾ」「マネの勝利」「コロエをめぐる」といった珠玉のエッセー群が配置されている。ヴァレリーはドガと親しく交わる一方、1900年にベルト・モリゾの姪と結婚し、モリゾ家さらにはマネ家(モリゾはマネの弟の妻)ともつながりを持った。こうした実際の人物交流と、その経験に裏打ちされたテキストは、象徴派詩人による印象派画家たちとの貴重な交流記録として、ひとつの文化史的証言の価値を担っている。

近年、文学を時代の思想・科学・芸術・風俗との有機的・総合的な関係のなかで捉えようとする文化史的視野に立った研究を促す環境が整いつつある。たとえば、ヴァレリー伝の決定版という評価を得ているミシェル・ジャルティの大著『評伝ポール・ヴァレリー』(2008年)は、ヴァレリーという作家の人生に徹底して寄り添うことによって第三共和制の文化史を活写した見事なルポルタージュである。このほか、近代フランス文学史を「前衛と後衛」をキーワードに再構築したアントワヌ・コンパニョンの『反近代主義者たち』(2005年)もまた、文学を文化史的なスケールで捉えようとしたすぐれた成果のひとつであろう。

こうした最近の研究動向を踏まえて、芸術家たちとの交流を綴ったヴァレリーの芸術論テキストを、その草稿にまで遡って再検討することは、ヴァレリー像を文化史的なかで再構築するためのひとつの豊かな契機となるはずである。ヴァレリーのデビュー評論『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』の研究によって学位(1997年、博士(文学)東京大学)を得たのち、研究代表者の今井は、一貫して生成論的手法によるヴァレリー作品の読み直しを行ってきた。科学研究費補助金研究代表者として平成15~16年度に『註と余談』、同17~19年度に『現代世界の考察』、同20~22年度に『詩学講義』の研究を行う傍ら、恒川邦夫氏、塚本昌則氏との共同研究「フランス国立図書館草稿部所蔵『ド・ロヴィラ夫人関連資料』 解読と翻訳の試み」(2003-2007年)などにも取り組んできた。ヴァレリーの芸術論を草稿からたどりつつ、ドガをはじめとする画家たちとの交流をあ

とづけようとする今回の試みは、今井による生成論的ヴァレリー研究の延長線上に文化史研究の要素を新たに加味して企図されたものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、ヴァレリーの芸術論テキストについて、主にフランス国立図書館所蔵の草稿および関連資料を調査することによって、その生成の舞台裏を明らかにすることを目的とする。具体的には、未だ十分な検討を受けていない『芸術論集』(初版1931年、増補1934年、1936年、改訂増補1938年、1957年)の草稿を解読し、ドガをはじめとする画家たちとの交流を詳細にたどることで象徴派文学と印象派絵画の関係を再検討し、文化史的な視点から新たなヴァレリー像を構築することを最終目的とする。

ヴァレリーの芸術論をめぐる研究には既に豊かな蓄積がある。とりわけ1960年代以降の「カイエ」読解に基づく作品の新たな読み直しや、1970年代後半以降の草稿整理後の綿密な生成研究がもたらした貢献はきわめて大きい。たとえば、ジャンヌ・ジャラの『ヴァレリーの形象への序説』(1982年)は、カイエと草稿の両者に目配りしたすぐれた成果の典型であろう。ごく最近では、ポール・ライアンによる『ポール・ヴァレリーとデッサン』(2007年)が、ヴァレリー自身のデッサンをめぐる網羅的な研究に取り組んだ労作として注目される。

しかしながら、草稿資料が分類整理されたにもかかわらず、『芸術論集』については、未だ生成論的な考察が網羅的にはなされていない。たしかに、ヴァレリーの芸術論については、発表された諸作品の中で、現代芸術に対する批判とその裏返しとしての古典的な制作美学への志向という批評原理が明快に記されているため、草稿調査へのインセンティブが生じにくいという事情はあるかもしれない。しかし、ヴァレリーの草稿は、作品に現れない生々しい記述が満載された思考の現場であり、推敲の諸段階を示す草稿に加えて、詩句や警句、デッサン、さらには書き込みのある名刺や案内状や新聞の切り抜きなどが挟まれているケースも多く見られる。ヴァレリーの草稿はじつに興味深い文化史的資料なのである。こうした草稿資料の現場に遡って『芸術論集』を再読する作業は、未刊草稿の活字転写による基礎資料作成という学術的意義がきわめて大きいという点で、印象派画家と交わった象徴派詩人ヴァレリーを文化史的なかで再定位する格好の契機となる点で、ヴァレリー像の文化史的な再評価にも大きな寄与をもたらすはずである。

### 3. 研究の方法

本研究の対象となるコーパスの規模を考慮し、科学研究費補助金の交付希望期間を三年間に設定する。最初の二年間は、ヴァレリ

一の芸術論テキスト関連草稿の調査（対象コーパス全体の通覧、活字転写と分析、手稿資料に内在する問題点の明確化、関連資料の渉獵）に重点を置く傍ら、識者との情報交換や講演会の企画開催を行い、三年目は特に資料面での不足部分の補強と確認を行うこととした。三年間を通じて、研究成果の社会還元を努めるべく、翻訳・解説等の刊行に尽力することを意識する。

全般に、自筆草稿等の第一次資料を扱う作業が中心となるため、パリのフランス国立図書館西洋手稿部（受信書簡を含めた作品手稿・ノート類の大半が所蔵されている）とジャック・ドーセ文学図書館（ヴァレリー作品の初出紙誌や献呈入り抜刷類が所蔵されている）への短期滞在型の資料調査出張が本研究活動の中核をなす。主要コーパスは、「ベルト・モリゾ」「マネの勝利」「コロエをめぐって」など1923年から1935年までの芸術論草稿を収めた巻（フランス国立図書館所蔵手稿分類番号 NAF19068）および「ドガ ダンス デッサン」「オノレ・ドーミエ」など1936年から1943年までの芸術論草稿を収めた巻（同 NAF19069）この二巻であり、可能な限りの活字転写と分析を行い、研究の基盤資料を構築する。さらに、「芸術の一般的概念」の草稿を収めた巻（同 NAF19060）や、講演草稿を収めた巻（同 NAF19070-19071）の他、プレイヤード版著作集に収録されていない展覧会カタログ序文、書簡なども研究コーパスのなかに含まれるが、これらについては重要度を随時判断しながら部分的な活字転写を実行する。ヴァレリーの詩、対話篇、楽劇との関わりも考慮すれば、調査対象のコーパスはさらに広がるが、今回は、研究期間内での実現可能性を経験的に考慮して、特に『芸術論集』に収録された主要テキストの草稿の活字転写と詳細な分析を遂行する作業に集中し、他の関係資料については、状況に応じて調査することとする。

#### 4. 研究成果

2011（平成23）年度は、資料調査、ヴァレリー芸術論集の翻訳刊行および講演会の開催を行った。資料調査については、長期休業期を利用した海外出張を二度行った。主要な研究対象コーパスを占める『芸術論集』草稿について、パリのフランス国立図書館西洋手稿部に赴き、マイクロフィルムでその全体に目を通した。調査の過程で、ヴァレリーと親交のあった何人かの画家についての思い出が語られた未刊行の講演タイプ原稿を完全筆写することができた。また、2012年2月に、筑摩書房より『ヴァレリー集成Ⅴ 芸術の肖像』を刊行し、主要な芸術論テキストの新訳と解説を上梓することができた。本研究のテーマと関連する研究者と打合せの機会を設けるかたわら、文学テキスト生成論の分野で射程の広いテーマを設定し、東北大学大学院文学研究科フランス語学

フランス文学専攻分野主催による講演会を開催した。本年度はナント大学名誉教授でヴァレリーにも詳しいジャン＝リュック・ステンメッツ氏による講演会「『地獄の季節』の二重の誕生」を企画し、多くの聴衆を集めることができた。

2012（平成24）年度も引き続き資料調査と講演会の開催を行った。資料調査については、本年度も長期休業期を利用した海外出張を二度行った。『芸術論集』草稿については、引き続きパリのフランス国立図書館西洋手稿部に赴き、詳細な調査に当たった。平行して、ヴァレリーと親交のあった画家（ドガ等）や作家（マルセル・シュオブ等）とのやりとりを記した書簡を調査し、重要と思われる部分については完全筆写することができた。また、ヴァレリーの芸術論テキストで参照されている諸文献のオリジナルの調査を、パリのアルスナル図書館他で実施し、レフェランス研究の点で有益な成果を得ることができた。調査のなかで発見した興味深い草稿断片に基づいて、2012年12月にテキスト生成論のシンポジウム（於東北大学）で発表を行った。講演会については、コレージュ・ド・フランス教授でヴァレリーにも詳しいアントワヌ・コンパニオン氏による講演会「写真映りのよい詩人」を企画し、多くの聴衆を集めることができた。専門レベルでの研究に加えて、こうした講演会を開催することで、研究テーマの問題性をより広いレベルで訴えることができた点を喜ばしく思う。

最終年度となる2013（平成25）年度は、前年度までの資料調査の成果を整理するとともに、未調査部分の調査を進展させることに重点を置き、引き続き長期休業期を利用してフランス国立図書館に赴いて、確認と補足を行うことができた。2013年9月には、詩の形式をめぐる国際シンポジウム（於中央大学）で発表を行ったほか、ヴァレリーの生地セート市のヴァレリー記念館で開催された第三回「ジュルネ・ポール・ヴァレリー」に招待参加し、青年期の恋愛と文学・芸術体験に触れた講演を行う傍ら、パリ第四大学教授のミシェル・ジャルティ氏と詳しい意見交換を行う機会に恵まれた。また、芸術論関連草稿の実地調査の成果を十分に生かし、2013年12月に、恒川邦夫氏との共訳によるポール・ヴァレリー『レオナルド・ダ・ヴィンチ論 全三篇』を平凡社から刊行し、複数の新聞・雑誌の書評欄で取り上げられたのは大きな成果であった。

初年度に「ドガ ダンス デッサン」を中心とする『芸術論集』の主要テキスト、次年度に関連する草稿や書簡類を調査し、最終年度は全体の確認に加え、補足資料の調査と一部筆写を実現することができた。三年計画の本研究はこのように全体としてきわめて順調に推移し、とりわけ、研究成果を翻訳・解説書の出版という目に見えるかたちで社会に還元することができた僥倖を心から喜び

たい。今後は、本研究で収集した一次資料を十分に活用しながら、さらに広く文化史的な観点から、ヴァレリーと文学・芸術の関係に関する考察を深めていく所存である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

今井 勉、「抽斗にしまった恋文」, 第三回「ジュルネ・ポール・ヴァレリー」招待講演、ポール・ヴァレリー記念館(フランス・セート市)、2013年9月20日

今井 勉、「ヴァレリーの描写詩『夏』」, 国際研究集会「定型詩の伝達と違反」, 中央大学、2013年9月7日

今井 勉、「イメージの終焉? 1930年の欄外注草稿を読む」, シンポジウム「無名時代 表現の獲得と揺らぎ」, 東北大学、2012年12月8日

〔図書〕(計2件)

恒川邦夫・今井 勉訳・解説、ポール・ヴァレリー『レオナルド・ダ・ヴィンチ論 全三篇』, 平凡社、2013年12月、386頁(9-148頁および233-293頁)

今井 勉・中村俊直訳・解説、『ヴァレリー集成Ⅴ 芸術の肖像』, 筑摩書房、2012年2月、507頁(1-375頁および465-496頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~tsutomu/index.html>

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

今井 勉 (IMAI, Tsutomu)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40292180

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：